未来予想図（みらいよそうず）

寝屋川市立梅が丘小学校　　２０２３・１０・６

校長室通信　　No. ２６

保護者の皆様へ

混沌の中に　光を求めて・・・（その１）

昭和３８年７月、寝屋川市内で１人の若い警察官が殉職されました。そして井上幸子氏（※平成２０年～２３年の４年間、寝屋川市教育委員会委員長としてご勤務）は、その奥様でした。

絶望の中から「光」をつかみ、幾多の苦難を乗り越えつつ、警察官の妻として、母として、そして教員として、力強く生きて来られた前向きな生き方は、周りの人たちにどれほどの感動と勇気を与えたことかしれません。

また、私自身、つらく苦しい場面に遭遇したときには、いつも温かく励ましていただき、その優しい人柄によって、生きる勇気をいただいたひとりです。

下記の内容は、井上幸子氏が、平成２０年４月９日に、寝屋川警察署において講演された要旨を、ご本人のご了解を得て、ここに掲載させていただくものです。

長文になりますが・・・、子育て真っ最中で奮闘されておられる保護者のみなさまに、少しでも、何か参考にしていただける部分があれば、幸いです。

－平成２０年４月９日　寝屋川警察署での講演会より－

おはようございます。ただ今、ご紹介にあずかりました井上です。

本日は皆様の大切なお時間をいただき、また、夫の遺影がありますこのような場でお話をさせていただくご縁に、深く感謝申し上げます。この度、このような機会をいただかなければ、私の数十年前の出来事は、整理することもなく、心の中に封印したまま、墓場まで持っていくことになっていたと思います。

夫の事故につきましては、子どもたちといまだに向き合うことができないでいます。しかし、このような場で皆様にお話しさせていただくことで、これを契機に２人の子どもにも語ることができると思います。

私は今、人生の黄昏（たそがれ）の時を迎え、改めて「人生をいかに生きてきたのか」を振り返ることができる年になりました。皆様方と同じ職にあった夫の死後、残された家族がどのように生きてきたのかという歩みをお話することで、何かお役に立つことがあれば幸いです。

＜結婚生活＞

私たちが所帯を持ったのは、寝屋川市の国道１号線沿いにある葛原という所です。大阪府で初めて、円形総ガラス張りの白バイ分駐所ができましたが、そこは住居も兼ねており、家族も一緒に住める駐在所の機能があるものでした。そのころの分駐所の周りは一面水田で、ずっと先まで障害物もなく見渡すことができました。

当時、京阪牧場という会社があり、牛を淀川まで連れていくのに国道を横切っていました。夫は、早朝から通行する車を止めて牛を横断させるのですが、当時は数台の車しか通らない時代です。今では想像もできない話ですね。また、夫は登下校する児童を安全に横断させるための交通整理を行っていました。

夫の身分は、大阪府寝屋川署勤務と大阪市警察部交通課の併任を命じられていました。当時、白バイ分駐所には、ほかの白バイ警察官の方もよく立ち寄られました。

当時の白バイは、陸王・ハーレー・ホンダなどで、私の夫は、陸王に乗っていました。夜は特に車が通らないため、スピードを出す車が多く、よく水田に横転する事故があり、夜中でも運転手が分駐所に助けを求めに来たものです。

私は、事故で顔中血だらけになっている運転手の方を、夫とともにタオルで血をふいてあげながら、パトカーや救急車が来るまで、「大丈夫ですよ。しっかりしてください。」と励ましていました。

中には、「お母ちゃん、お母ちゃん。」と母親を呼ぶ人もいれば、わが子や配偶者の名前を呼ぶ人もいました。しかし、その声もだんだんと小さくなり、一瞬にして命を失うという事故の恐ろしさを目の当たりにしました。その後、「父親が亡くなりました。」「夫が・・・」「息子が・・・」と、小さなお子さんを抱きながら、あいさつに来られる方たちに巡り会い、家族を失うことがこれほど悲惨で悲しく、つらいものなのかということが、私の心に深く刻み込まれていきました。

当時は、まさか自分の夫がそのような形で命を失うなんて、考えもしませんでした。

結婚したときに、夫は、「警察官は、死と隣り合わせの仕事をしている。普通の仕事とは違う。いつも下着だけは新しいものか、きちっと洗濯したものを毎朝そろえておくように。」と言っていました。

私は田舎者ですから、毎日下着をそろえながらも、それほど悲壮な気持ちを持たずに、「私の夫はそういう事故に遭って死ぬことはない。運転もうまいし、白バイは大きな単車だし、そんなことは絶対ない。」と安易に考えていました。

ある日の深夜１時過ぎでした。夫の留守中、２歳になった長女と２人で、分駐所の奥の部屋で寝ていたところ、８トンものトラックが飛び込んできました。寝ている私たち親子の目の前には巨大なタイヤがあり、娘を抱いて玄関に飛び出すと、トラックの運転席に運転手がちょこんと座っていました。

私はとっさに運転手に向かって、「免許証を出してください。」と運転免許証を預かり、電話で寝屋川警察署へ連絡しました。

そのころの主人の身分は寝屋川署の署員だったので、夫も帰ってきて事故の処理をしました。そのとき私は、こんな大きな事故に遭っても命が助かったのだから、もう私たちの家族には災難は襲ってこないと思ったものでした。

このトラックの飛び込み事故で分駐所が壊れてしまったので、私たちは近くの府営住宅に引っ越すこととなり、その後、長男も生まれ、平凡な日々が過ぎていきました。

（裏面　NO.27へ続く）